



活動報告：役員会を開きました

平成26年9月21日(日曜日)、13時から札幌市のかでる2・7(道民活動センター)320会議室にて、本年度2回目の役員会を開催しました。議事および論議の結果は次に示すとおりです。

1) 平成27年度全道里親大会・交流会に向けた準備について

全道里親大会の前日に交流会を開催することが恒例となっており、その企画と運営は地元の里親会が担うことになっています。来年度の全道里親大会(平成27年9月6日[日])においても、これまでと同様に交流会を前日(9月5日[土])に北広島クラッセホテルを会場として開催することが確認されました。また、交流会におけるアクションや子どもを対象としたゲーム・コーナーについては、実施することを前提として、10月ごろに予定されている第一回実行委員会までに会長と事務局が素案(たたき台)を作成することとなりました。



2) 平成26年度中央地区里親会研修会(冬期宿泊研修)について

例年1月中旬ごろに開催されている中央地区里親会研修会の企画と運営は、石狩地区と後志地区で交互に担当することとなっており、今年度は後志地区の順番となっていました。しかしながら、後志地区では夏の研修(第30回後志里親研修会―黒松内町で8月9日に実施)を担当しており、会員が減少傾向にある中で夏・冬とも担当する負担が大きいことが懸案としてあげられていました。協議の結果、今後は夏の研修は後志地区、冬の研修は石狩地区がそれぞれ固定して担当することが決定しました。それを受けて今年度から中央地区里親会研修会(冬期宿泊研修)は石狩地区が担当します。

3) 研修および広報担当理事の選任

総会において未決事項となっていた研修および広報の担当理事について、次の通りに決定しました。

研修担当：佐藤雅樹 理事(当別町)―中央地区里親会研修会(冬期宿泊研修)の企画・運営

広報担当：三神利恵 理事(恵庭市)―広報「わらび」の編集・発行

なお実際の活動においては、それぞれの担当理事とその協力者および事務局の支援の下で進められます。研修または広報活動に興味があってお手伝いをしていただける方は、ぜひ事務局までご連絡をいただければ幸いです。

情報：2014年度 未来のつばさ自立奨学支援制度の募集

公益財団法人 未来のつばさ財団から、「2014年度 未来のつばさ自立支援制度」についての案内が届いています。昨年までは特定非営利法人 エキスパート児童福祉支援協会が実施していた事業で、今年度から未来のつばさ財団が受け継いで「就職支援」および「進学支援」の二つの事業を合わせて実施するものです。

募集期間：2014年11月1日(土)～2014年12月26日(金)

支援対象者：児童養護施設入所児童、里親委託児童、ファミリーホーム入居児童、その他
(原則18歳を迎え、進学または就職する予定の児童)

支援予定者数：150名(進学者50名、就職者100名)

支援内容：進学・就職の支度金として、一人15万円(返済義務はなし)

申請方法：所定の申請書および推薦状(里親・施設長が記入)を募集期間内に提出

なお、支援対象に該当する児童が委託されている里親さんへは別途、実施要項、支援申請書など所定の申請書類を送りますので、積極的に応募されることをお勧めします。

**情報：札幌市里親促進フォーラムの開催について**

平成 26 年 10 月 25 日 (土) に札幌市教育文化会館にて「札幌市里親促進フォーラム」が開催されます。元高萩市長の草間吉夫東北福祉大学特任教授による「私が歩んできた道—こども家庭福祉の未来の展望を語る—」と題した特別講演と、里親 2 名、里親宅で育った元里子 1 名、里親支援専門相談員による発表と参加者が加わった「里親養育体験発表および意見交換」があります。詳しい内容につきましてはリーフレットを同封しますので、多くの会員さんのご参加をお願いします。

情報：道南の里親登録減少 昨年度 45 人 (2014 年 9 月 23 日 北海道新聞 朝刊)

経済的事情や虐待などで家族と暮らせなくなった子どもを育てる里親登録者数が道南で減り続けている。負担が大きいとの印象などを背景に、昨年度はピーク時の約 2 割の 45 人まで減少した。里親を必要とする子の数も少子化などで減っており、“需給”は一致しているかにも見えるが、里親候補は多いほうが子ども側のメリットも多い。関係者は里親登録を呼び掛けている。10 月は国の里親推進月間である。

「幼い里子から『お母さんはどうしたの』と泣かれ、答えに窮した」、「里子が困ったときに一番頼られる存在になりたい」。道南の里親たちでつくる函館地区里親会が 19 日に函館児童相談所 (中島町) で開いた月 1 回の交流会。里親が日ごろの思いを語り合う恒例の場だ。この日は里親ら 7 人が参加し、悩みなどを語り合った。

里子 2 人を育てている函館市内の主婦 (55) は「普段話せないことを聞いてもらえるので気持ちがすっきりする」と言う。子宝に恵まれず、里子を引き受け 13 年。「最初は夜泣きが続いたり、言うことを素直に聞いてくれないなど大変なこともあった。でも子どもと一緒に過ごせて幸せ」と笑顔を見せた。

渡島・檜山管内の里親登録数は 1962 年度の 201 人から減り続ける。3 人の里親経験がある熊木重昭会長 (69) は「里親が大変だとの印象が強いことや、制度が詳しく知られていないことに加え、里子が来ずにあきらめて登録をやめる人も多い」と話す。

里親には、一時的に預かる「養育里親」や虐待を受けるなどし専門的な援助が必要な子を育てる「専門里親」、養子縁組を前提とする「養子縁組里親」などがあるが、児童相談所によると現在登録する里親の半数以上は養子縁組里親が希望だ。

里親に預けられる里子の数も減っている。両親と死別したり虐待を受けるなどした子が里親や施設の援助が必要な子とされ、児童相談所による里親探しが行われる。ただマッチングがうまくいかず児童養護施設などに預けられる子が大半で、実際に里親のもとで里子となる子は函館児童相談所によると毎年 1～2 割程度。

この里子の数は 1966 年度の 100 人がピークで、本年度は 24 人。少子化に加え、児童虐待防止法で虐待の通報が幅広く義務付けられ、虐待が深刻化する前に児童相談所などの関係機関が対策に乗り出すようになり、親元にとどまることができる子が増えている背景もあるようだ。

里子は減っているが、里親登録数は多いほうが望ましいという。函館児童相談所の小田島一典地域支援課長は「里親の登録者が多いほど、里子となる子が転校しなくても済むなど、互いの選択肢が広がる」という。養子縁組里親以外の場合、実の親は子と会うことができるが子を取られると思ひ込んで里親に預けるのを拒む実の親が多いのも里親が減る一因となっている。小田島課長は「制度の周知を図り、子どもたちが愛情を受けて育つ環境づくりを進めたい」と話す。

函館地区里親会は、里親制度や里親体験を紹介する出前講座を行っている。
同会は (電) 0138・59・3621。